

# 兵士の歌・手紙・遺書に刻印された「言葉の力」 ～『万葉集』と、太平洋戦争の兵士のことばとをつなぐ（中学3年）～

松原 洋子

太平洋戦争において、特攻隊員として亡くなった兵士が遺した言葉・手紙・遺書をたどりながら、『万葉集』における「防人の歌」との関連をさぐり、人間が言葉に託した想いを読み取っていく指導である。防人と太平洋戦争の兵士とでは約1200年の隔りがある。また、社会情勢などにも大きな違いがある。にもかかわらず、両者が遺した言葉には共通点が多い。彼らが遺した言葉をひもときながら、言葉の力を再認識するとともに、『万葉集』の、後世への影響力についてもふれた。

キーワード 『万葉集』 防人 太平洋戦争 兵士 戦争 命 生 死 言葉の力 比べ読み

## 1 はじめに

平成26～27年にかけて、私は本学の特別開発研究プロジェクト研究に参加させていただくことになり、「戦争」をテーマにして、「命を見つめて伝える『言葉の力』」について追究していった。その結果については、本校の研究紀要第51号と第52号にまとめることができた。紀要51号では主に、太平洋戦争に倒れた人々（特攻隊員、学徒出陣の方、学徒動員や空襲体験者、従軍看護婦など）が遺した手紙・日記・遺書を中心にしながら、戦争や死と向き合うことで、いかに「命」を見つめ、それを「言葉」としたか、その言葉に宿った力はどのようなものか、についてを追究した。紀要第52号では、『平家物語』を中心に、太平洋戦争の兵士の生き方と比べ読みをすることで、登場人物あるいは戦争体験者の方々が、いかに戦争と向き合うことで命を見つめ、言葉の力を発揮していたかを認識し、その言葉の力を実感しあう学習指導を仕組んだ。

このときには機会がないため実践できなかったのだが、『万葉集』の「防人の歌」と太平洋戦争の兵士の言葉とをつないで考えさせることは、昨年の指導を受けた者であれば違和感もなく受け入れられるし、学習者の視野も広がるのではないかと思った。また、『万葉集』は後世、さまざまな享受がされている。せっかく修学旅行に関連させて『万葉集』を学んだところであるので、『万葉集』を別の角度から見るという体験も意味のあることではないかと思い、実践した。

## 2 指導の概要

本校には「人と文化」という名称の、京都・奈良方面で学ぶ修学旅行がある。総合の学習と位置づけ、中学2年生後期から事前学習が始まる。教科からも、国語、社会、美術が中心となって指導を行う。国語科では『万葉集』の学習が中心となる。今年度も、修学旅行のコースにかかわる文学とともに、『万葉集』の学習を積んだうえで旅行を実施した。『万葉集』のふるさとしてある飛鳥地方では徒歩でグループ活動を行う。甘樫丘にのぼり、大和三山を見渡ししながら学年全員で歌う「万葉歌碑の歌」（志貴皇子の歌 巻1-21にメロディをつけたもの）は圧巻である。旅行から帰った後には、事後指導がある。

【第1・第2時】 修学旅行後に、これまでの『万葉集』の学習ではふれられなかった「防人の歌」の読解を行った。時数の関係もあり、次ページのようなプリントを作成し、学習者が防人の歌を読みたくなるよう、主な歌のみ現代語訳をつけ、古文読解の負担を削減した。ただし、学習者が話し合いや発表の中で歌の表現を取り上げる場合には、原文から引用して発表することとし、全く原文を見ないという状況はなくなるようにした。

4352: 海原のゆたけき見つつ葦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ(大伴家持)

4353: 難波津に御船下る据ゑ八十樽貫き今は漕ぎぬと妹に告げこそ(若舎人部廣足)

4354: 防人に発(た)たむ騒ぎに家の妹がなるべきことを言はず来ぬかも(若舎人部廣足)

わかとねりべのひろたり

防人に発(た)つざわめきで、家の妻の暮らしのすべを言わずに来てしまった。

4355: 押し照るや難波の津ゆり船装ひ我れは漕ぎぬと妹に告ぎこそ(物部道足)

4356: 常陸指し行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に知らせむ(物部道足) もののべのみちたり

ひたちをさして行く雁(かり)があればよい。おれの恋心を書いてことづけを妻に知らせたい。

4357: 我が面の忘れもしたは筑波嶺を振り放け見つつ妹は惚はね(占部子龍)

4358: 久慈川は幸くあり待て潮船にま構しじ貫き我は降り来む(丸子部佐壯)

4359: 筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼も愛しけ(大舎人部千文)

4360: 鹿(あられ)降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍(すめらみくさ)に我れは来にしを(大舎人部千文)おとねりべのちふみ

(あられふり)鹿島の神を祈り続けて、天皇の兵士として俺は来たのだ。

4371: 橋の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも(占部廣方)

4372: 足柄のみ坂給はり返り見ず我れは越え行く……(長歌)(倭文部可良麻呂)

4373: 今日よりは返り見なくて大君の醜の御船と出で立つ我れは(今奉部与曾布いままつりべのよそふ)

今日からは振り返らないで、大君のつたないまもりとして行くのだ、おれは。

4374: 天地の神を祈りて獵矢貫き筑紫の島を指して行く我れは(大田部荒耳)

4375: 松の木のみ並みたる見れば家人の我れを見送ると立たりしもころ(物部真嶋)

4376: 旅行きに行くと知らず母(あもしし)に言申さず今ぞ悔しけ川上臣若か(わかの)おみおゆ

長旅に行くとは知らずに、母に挨拶をせずに来て、今ではくやしい。

No.5

資料の一部。読ませたい歌にだけ現代語訳を載せ、歌の内容がわかるようにした。

上記の資料には、「防人の歌」のほとんどすべてを載せたが、現代語訳を載せた歌は以下の20首のみとした。現代語訳があるものは直接今回の学習対象とするものである。現代語訳がないものは、個人的に発展学習をしたくなった者用である。(修学旅行では、学習者はグループごとの研究テーマと個人研究テーマとを持って臨んだのだが、その中に『万葉集』研究者もいるので、ここでは、基礎的な学習をするところと、発展的により深くより広く学びたい者も満足できるところとの2種類を作ったというわけである。)

本実践の対象歌(現代語訳がある歌)

4322・4327・4334・4337・4343・4346・4347・4356・4379・4382・4394・4401・4405・4416・4420・4423・4424・4425・4427・4436 以上20首

そして、学習者40人を機械的に5人グループに分け、それぞれのグループに1つの課題を指定し、発表させた。その課題は以下のとおりである。

- 課題
- 1 けっこう年齢が若いと思われる防人の歌は?
  - 2 けっこう年齢が上と思われる防人の歌は?
  - 3 防人になったことを前向きにとらえ、いちばんがんばろうとしている防人の歌は?
  - 4 防人になったことが本当にいやでいやでたまらない、いちばん消極的な防人の歌は?
  - 5 防人として出発するときの状況がいちばんわかる歌は?
  - 6 息子が防人になったことを受けとめるとき、父親と母親とではどう違うか?
  - 7 防人の妻ならではの視点から歌ったことがよくわかる歌は?
  - 8 現代人とはものの考え方が違うなあということがよくわかる歌は?
- (3項目は見つけてほしいが、できるだけでよいです。)

グループごとに違うテーマを研究することになるので、責任重大である。また、20首すべてを読まないと答えは出てこない。よって、全員が一生懸命プリントを読み、真剣にグループで話し合うこととなった。表現を根拠にして作者のプロファイリングを行い、家族構成や心情をさぐっていく作業は、学習者が大変喜んだ。まるで謎解きのような気分になるからであろう。この活動の中で、多くの学習者が関心を寄せたのは、以下のようなことであった。

#### 発見・感想

- ・防人に行きたくない人がやたら多い。
- ・防人になるのはいやな人ばかりかと思ったら、防人に行くことに誇りを持っている人もいた。
- ・けっこう忙しく、あわただしく防人の旅に出たようだ。
- ・戦いに行くときは、別れをおしむ人が多い。つらい歌が多い。
- ・名もない防人たちの歌も『万葉集』にはこんななのっているのか！
- ・防人といっても、三者三様、十人十色の想いがあったのにびっくり。
- ・魂振り（たまふり）としての「袖を振る行為」や、想いを紐の結び目にこめる行為がたくさん書いてあって、びっくりした。これらは昔、生活の一部だったのだろう。
- ・子どもを守りたいという気持ちは同じなのに、父と母とでは方法がこんなに違うのか。
- ・「ふたほがみ」はとんだところで名前が残ってしまったな。悪者として1200年後にも名前が伝わろうとは、本人は思ってもみなかっただろう。
- ・しかし考えてみると、『万葉集』をつくった人は太っ腹だ。「ふたほがみ」のことなどもそのまま載せてしまうのだから。
- ・防人になるのは、ぼくはいやだ。全然報われない。 他

こうして、1200～1300年前の庶民の生活ぶりや心情、風習などを、表現からさぐり、分析していった。

【第3時】 『万葉集』という古代の世界と、太平洋戦争という70年前の世界とをつなぐ時間である。

#### ① 結ぶ

『万葉集』では例えば、

4405 我が妹子が偲ひにせよと付けし紐 糸になるとも我は解かじとよ（朝倉益人）

4427 家の妹ろ我を偲ふらし真結ひに結ひし 紐の解くらく思へば（作者不明）

のように、「結ぶ」行為は魔除けであり、新たなものを生じる力であり、結び目は閉じた空間である。この歌では、紐を結んだ妻が夫の無事を祈る念の強さが、紐の結び目の中に凝縮してこめられている。

太平洋戦争ではどうか。日露戦争の頃から始まり、第2次世界大戦まで日本で盛んに行われた「千人針」。特に第2次世界大戦時には戦意高揚の手段として、「千人針」が奨励された。ここにはまさに人々の、結び目にこめた「武運長久」の思いがつまっている。さらに、穴の開いていない五銭硬貨や十銭硬貨を縫い込むことで、「死線（しせん＝四銭）」、「苦戦（くせん＝九銭）」を越えるという考えは、まさに古代から現代に続く「言霊信仰」そのものである。さらに、女性（妹）、布、糸、赤い色が持つとされた呪術的な力を信じる行為は、『万葉集』では日常的に見られる考え方なのである。ここに来て、学習者にはにわかに、古代万葉人と現代人とがつながり、学習に興味を持ち始めた。

#### ② 布にこめた想い

次に導入した教材は、『知覧からの手紙』（水口文乃 著 新潮社 2007年）の一節である。この本は、特攻隊員として散華された穴澤利夫氏とその婚約者の智恵子さんとの間に交わされた、悲しい手紙のやり取りと、その後が描かれている。実はこの本は昨年度も別の箇所（穴澤氏の遺書）を教材化しており、学習者にとっては穴澤利夫氏の存在は初めてのものではなかった。穴澤氏と智恵子さんは『万葉集』を介してお互いの想いを告げるということもしている。

今回教材として扱ったのは、次の部分である。

『下さったお手紙をみながら、なれるものなら、あの白いマフラーになりたいな—と思いました。神聖な帽子や剣にはあまりなりたくはありませんが、何気なくまかれ、いろいろ重宝な、そしていつも離れない、あなたのマフラーにならなりたいと思います。(以下略)』(p. 84)

(面会日に、穴澤利夫氏は智恵子さんのマフラーを借りたまま、持って行ってしまふ。その後、彼は智恵子さんのマフラーを巻いた上に本来の白いマフラーを巻くようになる。出撃時に撮影された穴澤氏の写真を、戦後に見せられて、智恵子さんは…)

私は「自分も負けずに朗らかに笑って征く」と書かれていた利夫さんの遺書を思い出しました。写真の利夫さんは首元がふくらんでいます。白いスカーフの下に私のマフラーを巻いて下さっていたのでしょう。最期まで本当に誠実な人だった……。(p. 180)

以上、いずれも『知覧からの手紙』より

これを読んで自然に、学習者は『万葉集』のプリントを読み直し、共通点探しを始めた。

4356 我が母の袖もち撫でて我がからに 泣きし心を忘らえのかも (物部乎刀良)

ここには防人の母が描かれている。母にできることは息子の無事を祈ることのみである。母は泣きながら、自分の袖をもって、いつまでもいつまでも我が子の体を撫でている。母の袖には無事を祈るという一念がこもっている。ひたすらに、元気であれ、という念を、袖(布)の力を使い、息子の体にうつし、息子を守ろうとしているのである。母のパワーで息子を包み込もうとするような、強い想いである。

穴澤利夫氏と智恵子さんはどうか。利夫さんの白いマフラーになりたいという望みと、智恵子さんのマフラーを下に巻いてから本来の白いマフラーを巻いて出撃した利夫氏。共に、マフラーに人の想いがこもっていると感じているからこそその行為である。智恵子さんのマフラーは利夫さんにとって、智恵子さんそのものなのである。

防人の母と70年前の恋人とが、同じことを考えていた!という驚きと発見によって、学習者にとって古代と現代の距離が、よりいっそう短くなってきた。

### ③ 出征への想い(本音)

この段階での学習者は、防人も、太平洋戦争の出征兵士も、戦争に行くことについてどう思っていたのか?について、知りたくなっていた。この学習を始める前は短絡的に「戦争に行きたい人なんているはずがない。戦争反対!」と思っていた多くの学習者であったが、防人の歌の中には出征を誇らしく思う歌があったり、太平洋戦争では特攻隊に志願する人がいたりする事実を知ったからである。

ここで対比する教材は次のとおりである。

『万葉集』から

4369 筑波嶺のさ百合の花の夜床にも 愛しけ妹ぞ昼も愛しけ (大舎人部千文) ※現代語訳なし

4370 霰降り鹿島の神を祈りつつ 皇御軍に我は来にしを (大舎人部千文) ※現代語訳あり

『知覧からの手紙』より

(利夫さんの親友の) 佐藤さんは利夫さんの(陸軍航空隊への) 志願を知ったときに、

「智恵子さんをどうするつもりだ」

と詰め寄ったそうです。利夫さんはこうと決めたことは絶対に譲らない、強い意志を持った人でしたから、

「国が俺たちを求めているんだ。今、それに応えずしてどうするんだっ!」

と、珍しく激しく言い返してきたといいます。

「だからといって、航空なんて危険なところへ行くことはないんじゃないか!」

「俺は兵隊なんかなりたくもない……」

「じゃ、なんで」

「国家にとって、航空兵が一番必要だからだ」

当時、私は自分の親よりも国父である天皇を大切にす「大義親を滅す」ということが、この国に

生きる男として当然の考えだと思っていました。ですから、ふたりの間にあったやり取りを佐藤さんから聞いたときには、利夫さんの意見も理解できました。

それでも、心の中には理屈では片付けられない気持ちがひそんでいます。(p. 73~p. 74)

『万葉集』4370の歌は、天皇の兵士の一員として前向きに「防人」をとらえている歌と、学習者は読み取っていた。現代語訳をつけなかったため、誰も読んでいなかったのだが、実はその前の4369も、同一人物の歌である。対象が中学生なので、「筑波の嶺の百合の花のようにかわいい人は、夜でも昼でも、いつでも、一日中いとしくてならない。」程度のおさえにしておいた。

防人の大舎人部千文は、愛しくてならない彼女がありながら、戦の神として有名な鹿島の神様に武運長久の願をかけて、出征していく。穴澤氏は婚約者の智恵子さんがありながら、当時一番危険な部署に志願していく。これをどう読み解いていったらよいか？という問題提起で、この時間は終わった。

【第4時】 これまで出された資料をもとに、話し合い、まとめる時間である。

S1「恋人と共にいたいなら戦争には行かなければよいのに。」 ☞兵役の義務の存在を忘れている。

S2「兵役の義務があったから、しょうがなく行った。」 ☞それではなぜ、わざわざ志願するのか？

S3「ホントはそんなに大事な恋人じゃなかった。」 ☞これについては直ちに反撃された。いかに女性を大切に思っているかは、「愛しけ」が繰り返されたりしていてわかる。

S4「本音は恋人と一緒にいたい。出征したい気持ちがうそだと思うけど、志願までして積極的になってるところがよくわからない。」

S5「どっちも本当の気持ちかも。兵士の誇りと愛と。」 ☞この発言は多くの学習者の目を見開かせた。

S6「恋人が大切すぎて、恋人に生きていてほしいから、自分の命を差し出してるんだ。」 ☞多くの学習者をうならせた意見。

ここまでは防人と太平洋戦争の兵士との共通点についてを論じてきた。この後、相違点についても考えさせた。

S7『『万葉集』のほうがのどかだと思う。「ふたほがみ」の悪口も言えるし、それがそのまま『万葉集』に載っちゃうし。太平洋戦争のさなか、手紙や遺書には検閲があるし、『非国民』とか言われてしょっぴかれるし、言いたいこと言えなかったんじゃないかな。」 ☞「検閲」については、昨年度の学習がいかされた部分である。太平洋戦争のさなか、制限された表現法の中からどのようにして気持ちを伝えたか、そこにどのような「言葉の力」があるかを学んだ成果である。

最後にまとめの文章を書いて、この学習は終わった。

### 3 学習者がまとめた文章の中から

#### 作品 (男子A)

約1300年も前の防人と、約70年前に命を国に捧げなければならなかった兵士。切り離して考えがちだが、実は隠れたつながりがあったのだ。こんなに共通点があった！

つながり① 共に、国から召集され、拒否できない。いくら急でも行かなければならない。

つながり② 家族や大切な人と離れ離れになる。

つながり③ 死を覚悟しなければならない。死と隣り合わせ。

つながり④ 安全祈願の方法が似ている。言霊信仰・結ぶ文化・袖振り・頭を撫でる、など。

つながり⑤ 大切な人を想う気持ち。

しかし、両者には相違点もある。防人には嫌なことを「嫌だ」と言える自由があった。70年前の兵

士には、その自由さえなかった。

#### 作品（男子B）

1300年前の防人と、70年前の兵士を対比したとき、こんなに共通点があると思わず、びっくりした。出征の日。「行かないで。」と心の中で思っている、国の為だと我慢して笑顔で送る。そんな苦痛な状況が現代の日本にあるだろうか。いろいろな方法で自分のエネルギーを相手におくこと・私と  
思ってほしいマフラー、無事を祈って皆で作る千人針、その一つひとつに、今では到底考えることも  
読み取ることもできない悲しみがあつた。

この授業で私が感動したのは、出征するときに、「お国の為」だからという理由だけで、断りもせず、「嬉しいことだ」「喜ばしいことだ」と言える、寛容な心である。誰だって、長生きもしたいし、簡単には死にたくなかったはずだ。きっと、大切な人を思い浮かべ、その人が生きていてくれるならと思って命をさしだしたのだろう。これは究極の愛だ。

国の為に、平和のために戦ってくださった先達への感謝を忘れないように生きなくては！と思った。

#### 作品（女子C）

どんな時代の人でも、戦いに行く人、見送る人の想いは同じなのだとということを再認識し、生きる人同士のつながりを感じた。家族がお互いを想う気持ちには、どんな時代の歌・手紙・遺書にも心打たれる。本当に、家族を失いたくない、もっと生きていてほしいという切実な思いがこもっている。

そんな思いすら自由に表現できないほど、第2次世界大戦のときは検閲があつて、状況が過酷で残酷だったのだなあと思った。

#### 作品（女子D）

『万葉集』の時代は神々とともに人間がいて、人は神からたくさんのパワーをいただいていた気がする。この考え方が、現代にもあれこれつながっているということを知って、面白かつた。『万葉集』と現代の文章が、こんな風につながっていくということを知って、本当に面白かつた。なんとスケールの大きい授業だろう。

#### 作品（女子E）

「命がけで出征する」「苦しさ・辛さを言えない」「愛する人へのあふれる気持ち」この3つが時代を越えてつながっていた。急な出征の防人も、検閲に苦しむ兵士も、自由に言葉を伝えられる現代の私たちも、一人の人が想う気持ちを歌に込めることで想いを違う時代の人にも伝えることができる。言葉や歌の力を、今私は味わっている。今と昔と未来を繋いで考える視点が大切だ。

## 4 成果と課題

成果としては、学習者が視野を広げることができたこと。言葉の力を再認識できたことである。

課題は、教材の範囲が多いため、1つひとつの歌の読解を丁寧にはできなかったことである。

#### 参考文献

- ・「戦争と向き合うことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感し合う学習指導～さまざまな較べ読みを通して（中学3年）～」(東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要題51号 2015年3月)
- ・戦（いくさ）と向かい合う【その2】～『平家物語』を中心に、今と昔の比べ読みを通して戦争と向き合うことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感し合う学習指導（中学2年）」(東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要第52号 2016年3月)